

岡崎英彦、糸賀一雄とともに

—「この子らを世の光に」と「本人さんはどう思
てはるんやろ」—

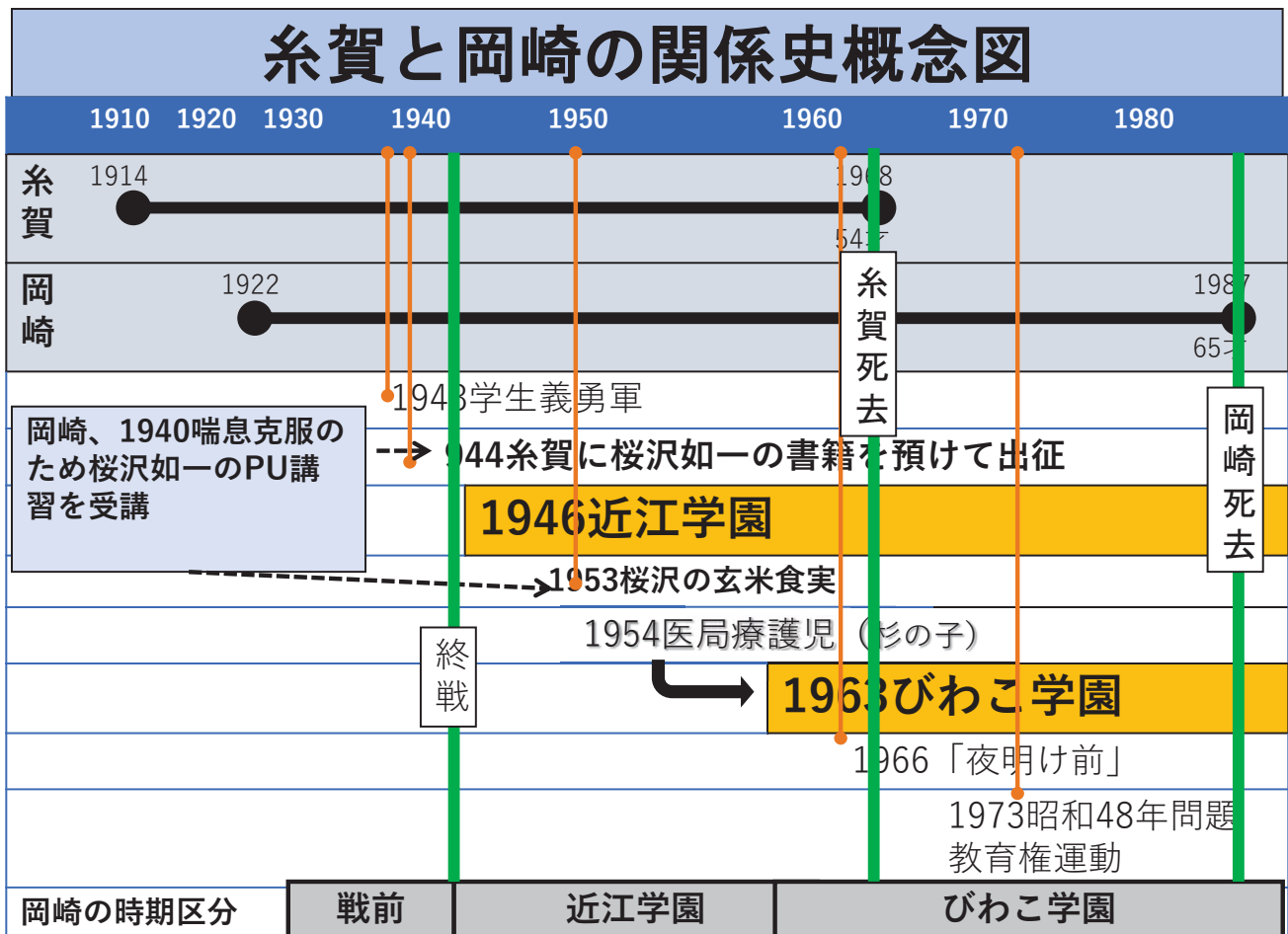


2022(令和4)年6月2日創立記念日
岡崎英彦生誕100年記念講演
遠藤 六朗

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

1



2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

2



2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

3

はじめに

糸賀亡き(1968年)あとの岡崎の思いは、「追想集『糸賀一雄』」(1970年)に示されている。

「この子らを世の光に」と題されているこの追想文は3つで構成されている。これを参照し話を進めたい。

まえがき 戦前学生義勇軍での糸賀との出会いと近江学園参加の決意等

前半部 1950年前後の糸賀の思索の深まりをとらえ、「この子らを世の光に」に至る糸賀の思想形成を的確にとらえている。

後半部 「この子らを世の光に」を自分のものとするためにこれから歩んでいこうという決意

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

2

4

I. 戦前から戦後にかけての交流 糸賀一雄と岡崎英彦―桜沢如一を 介して―

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

5

桜沢如一のPU（無双原理）及び食養論

岡崎は早くから喘息を患い、大阪高校（旧制 1938年）、その克服を桜沢のPU（無双原理）に学び修養を積んでいた。

京都帝大医学部入学後、この桜沢から京都紫野の興亜寮の紹介を受けたのではなかろうか？

岡崎が軍医として出征する時、糸賀に桜沢の著作15冊を預けたが、それが戦後糸賀の目にとまり近江学園の玄米食の試行につながっている。桜沢は戦前軍部に睨まれ、また暴行を受けていたようだ。

学生義勇軍 糸賀一雄との出会い

社会奉仕によって心身鍛錬を目的とした学生団体（会長は十河信二）で、関西支部長が糸賀一雄であった。興亜寮は関西学生義勇軍の拠点。

糸賀は当時滋賀県秘書課長。岡崎は多賀町の芹川ダム工事奉仕作業の打合せに何度か滋賀県庁をたずね糸賀に尊敬の念をいただいたようだ。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

6

Ⅱ. 近江学園時代、岡崎がとらえた 糸賀の思想形成

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

7

岡崎は、糸賀の思想形成を側でみていた！ 糸賀の思想形成を、糸賀追想集に岡崎は「この子らを世の光に」と題して書いているが、岡崎は、近江学園創設後の1950年前後に糸賀の思索の深まりをとらえている。これが糸賀の「この子らを世の光に」の出発点である。

1946年～1950年代

生命の自覚 「今ここに生きている実感こそが生命感覚」、生命とは「幸福追求の流れ」。そこにおいて、生きているもの一切は差別はない根源的事実だとする。

1960年前後

「異質の光」

目も眩む「文明の光」に対して、この子らの放つ「異質の光」を私たちはひろげてきた。「この子らの感じる世界、意欲する世界、何を考えているのか」を知ること。

1960年代

「この子らを世の光に」 価値の転換を。

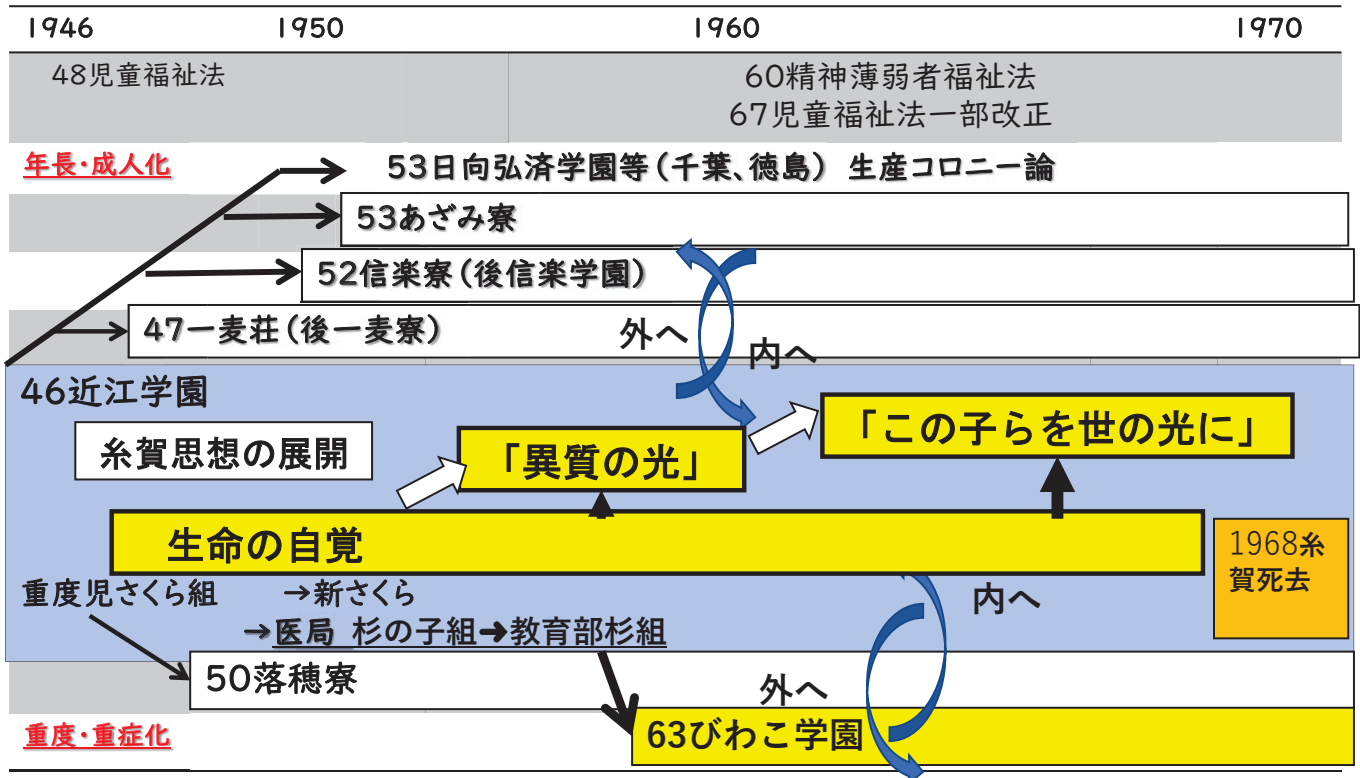
2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

4

8

近江学園時代と糸賀思想の展開



岡崎生誕100年記念講演

2022/6/2
9

1950年前後糸賀「生命の自覚」を問う

契機となった2点。

一つ 戦後直後の厳しい環境の中で船出した近江学園は、生活共同体としての自覚を職員、児童すべてに自覚を求めます。この時、糸賀は世俗に流されていく職員に対しても厳しく臨んだのではなかろうか。そこに糸賀自身の苦しみをみます。敗戦後の社会建設における自覚の問題

二つ目 近江学園が重度化していく中で、軽度・中度にとっては迷惑な存在であり、それはそれとして重度児だけの施設を作ります。それが落穂寮です。その後、再び近江学園園児の重度化が進み、その中で、糸賀も、岡崎も差別を克服していきます。この落穂寮創設とその後近江学園園児の再度の重度化の経過をとらえることは、糸賀、岡崎の思想形成にとって非常に重要です。

糸賀はこの頃の思索を「生活即教育」（1952年）にこう書いています。

「生命は幸福の実現を追求して行く一つの流れである・・・われわれも最も端的に生命の根元的事実にさかのぼるような純粹な体験を味ってそれを万人共通の出発点とするのでなければならない。

意識といい、意欲といい、高いといい低いという分析と対立の立場は、生命の自覚における生活においては、いわば身にまとう衣の多彩ないろどりのようなもので、生命の具体性に対して、反って抽象的なものでしかない。

分析と対立と、つまりあらゆる科学と暴力が、生命にとって宿敵のようにまとわりつきながら、而も生命はそれによって豪も損傷されない相対即絶対のものであること、この事実こそ『自由』の本体であり、教育という営みの地盤でなければならない。」

糸賀は「今ここに生きている実感」にこそ、いっさい差別なく平等なものがあるんだと気がつくわけです。

「今ここに生きている実感」、そこはすべての者がもつ「生きる」「生きている」「生きたい」という生命の世界です。目の前の蝶、小鳥、そして草花や樹々、みんな生きているものはすべてそうして生きている。それこそが具体的な生命の姿なんだ。そこは差別は一切ない世界であり、そこに気がつくこと、それが自覚だということです。つまり、「自分のいのちに於いて、自分がいのちをもっている自分を知る」ということ。直観的に知ることを行っているのだと思います。それが根元的な事実なんだと言うのです。その生命の世界こそ、この子らの世界なんだと。ここが糸賀の生命思想理解の鍵であり、源流です。糸賀思想は、この源流から切り離してはいけません。

1960年前後 糸賀「異質の世界」

近江学園年報8号「当面の諸問題」（1958 医局で療護児のとりくみが始まって3年後の著作）

「白痴児も、肢体不自由児も、二重三重の子どもたちも、だれひとりの例外なく、感ずる世界、意欲する世界をもっている。ただ生かしておけばよいのではなく、どのような生き方をしたいのと思っているかを知り、語り合い、触れ合い、お互いにより高い生き方へと高められてゆくような指導がなされねばならない。」

「異質の世界」（1960年前後 執筆年不明）

「この人たちの放つ光を光としてうけとめる人びとの数をふやしてきた。異質の光をしっかりとみとめる人びとが、次第におおくなりつつある。」 「異質の光」とは新しい価値、「その存在そのものから世の中を明るくする光」である。

1968年「この子らを世の光に」（福祉の思想）

「人間と生まれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということ、認めあえる社会をつくらうということである。『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみ政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。この子らが、生まれながらにして持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである。」



価値の転換

Ⅲ. びわこ学園の展開 そして糸賀亡き後の岡崎 —岡崎「エモーショナルなもの」の展 開—

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

15

びわこ学園と岡崎「エモーショナルなもの」の 展開

1964年 「はだかのいのち」「いのちのつながりの火」
「人間関係のもっとも深いところの“幸”」

これは糸賀が存命中の「びわこ学園だより」第1号に書かれた一文である。糸賀の生命思想を色濃く反映しているが、まだ抽象的で観念的なところがある。

1976年 「医学徒と『福祉』」

1983年 「共に生きる」

1987年 糸賀先生への応答

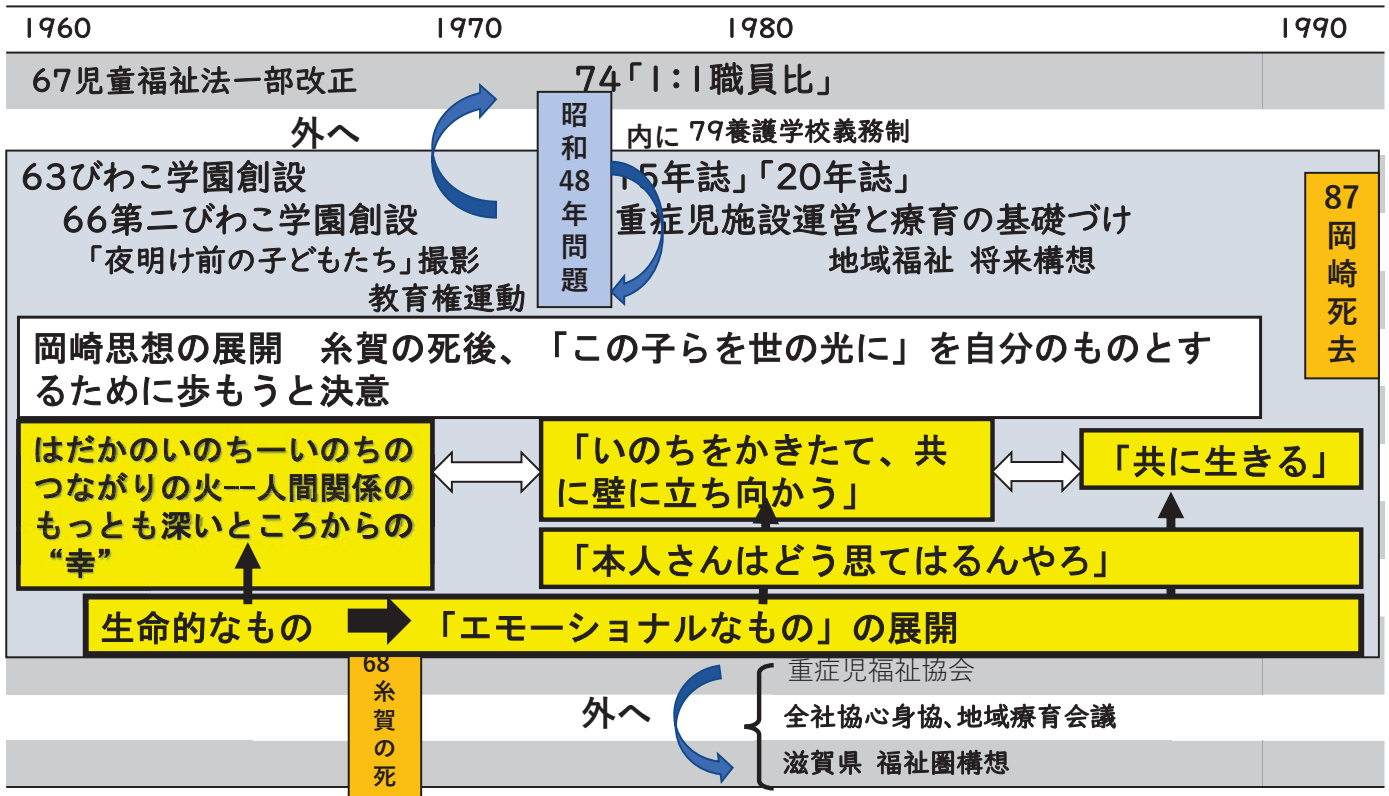
「本人さんはどう思
てはるんやろ」

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

16

びわこ学園の歩みと岡崎思想の展開



2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

17

1964年 岡崎「ごあいさつ」

「びわこ学園だより」1号から抜粋

「私達職員は毎日の生活のなかで、それぞれの仕事の分担において、子供達の前に立つのでありますが、いつも子供の“いのち”と相対するという感を深くしております。これは少しきざない方ではありますが、現在の学問や技術だけでどうすることもできないほどの障害を根にもっている子供を前にして、私達はやはり、赤裸々な人間として一つの“いのち”として相対する以外にすべがないように感じます。この子供達も、他の子供達と同様に、しかし非常に限られたさだめのなかで、全力で生きているのです。従って私達も私達なりに、全力で相対する努力なくしては、この子供たちについていけないものを感じております。そのふれ合いのなかで感じとられたものが、この仕事の意味であろうと思います。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

18

このようなふれ合いの場が、国の施策の一つとして進められるようになったのです。これは重症心身障害児にとって大きな幸であることは論をまちませんが、単に子供達や家族の幸だけに止らないはずであります。おそらく今迄は、ほとんどの家庭で、社会の人の眼にふれることも少なく、その子供と父や母、又は家族の人々との間に“いのち”のつながりの火がもえていたにちがいありません。これからは、子供と多くの一般の人々との間にも、そのつながりの火がともされることになるのであります。私達はそのことが人間関係の最も深いところからの“幸”そのものであると考えます。つまり子供達や家族は勿論のこと、社会の人々の幸がより広げられ、深められることになると思います。

私達は全く同じ意味をもった人間の生命のつながりの火が、あらゆる困難をしりぞけて、一步一步学問を開発し、社会制度をかえてきた実例を、歴史のなかにみることが出来ます。いやそのことが、人類の歴史そのものだといってもよいかも知れません。」

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

19

1976年岡崎「医学徒と『福祉』」

「子どもの欲求が強く出ても、重症心身障害児といわれるような子どもの場合、それが直接に他の子どもとぶつかることはまず少ない。ぶつかる相手は、むしろ自分自身のもつ障害そのものであり、または障害を客観的に評価して設定された制約である。自力ではもちろん、まわりの人の力を合わせても、簡単には克服できない壁である。日々それをさけて通ることができない。時間をかけても、その壁を少しでも押しやり、乗り越すしか生きてゆく道はない。そうとすれば、今はかなわぬまでも、自身が壁に立ち向かう構えを子どもに要求せねばならない。

その方向への子どもの欲求をひきだし、かきたてながら、まわりの人びとも、子どもたちとともにその壁に立ち向かう構えがいる。・・・重い障害児の場合も、子どもとおとなが同じ方向に向かって立ってはじめて相互に切実な欲求をふまえて、ともに生きる実感をもちうる、その結果として、子どもたちの育ちが期待できることを、これまでの経験が示した。」

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

20

1983年 岡崎「共に生きる」

残念ながら私達はまだ園児・生の気持を的確に知る目をもっていません。それは必要だと思いますが、客観的に彼等を見るだけの目では、矛盾をこえる彼等の育ちの力にならないのです。日々さまざまの枠を強いられる園児・生のやり切れない悩み、怒りを私達も切ない思いでうけとめ、それを心に秘めて、彼等の喜びや積極的な意欲をさそい出す、ひたむきな、裸のかかわりを通じてしか養えない目がほしい、そういうかかわりは、当然園児・生自体の目、物事をうけとめる構えを広げるにちがいないからです。それでやっと気持の通じた、共に生きる「世界」が開ける筈です。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

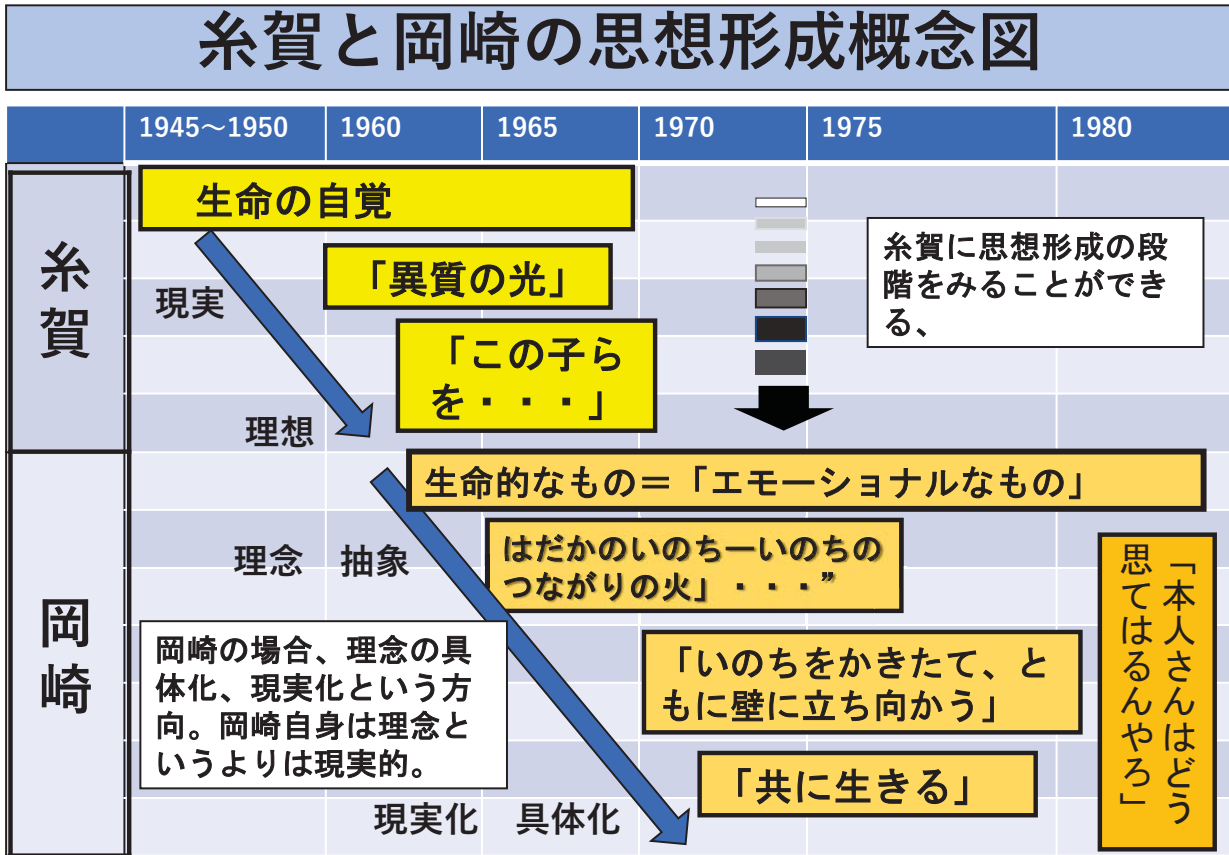
21

IV. いのち一響き合う 糸賀と岡崎

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

22



2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

23

1. 「生命の自覚」と「はだかのいのち」「人間関係のもっとも深いところの“幸”」

糸賀

生命は幸福の実現を追求して行く一つの流れである・・・われわれも最も端的に生命の根元的事実にさかのぼるような純粋な体験を味ってそれを万人共通の出発点とするのでなければならない。

岡崎

“いのち”のつながりの火がもえていたにちがいありません。これからは、子供と多くの一般の人々との間にも、そのつながりの火がともされることになるのであります。そのことが人間関係の最も深いところからの“幸”そのものである。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

24

2. 「この子らの感じる、意欲する世界・・・」と「いのちをかきたて、共に壁をおしやる」「共に生きる」

糸賀

「異質の光」
「どのような生き方をしたいのと思っているかを知り、語り合い、触れ合い、お互いにより高い生き方へと高められてゆくような指導」

岡崎

「子どもの欲求をひきだし、かきたてながら、まわりの人びとも、子どもたちとともにその壁に立ち向かう構えがある。・・・重い障害児の場合も、子どもとおとなが同じ方向に向かって立ってはじめて相互に切実な欲求をふまえて、ともに生きる実感をもちうる、・・・これまでの経験が示した。」

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

25

3. 「この子らを世の光に」と「本人さんはどう思てはるんやろ」

糸賀

「異質の光」の方へ、「この子らを世の光に」。価値転換によってもたらされる。「いのちの光」において一切は差別なき平等である。

岡崎

岡崎は、それを実践的に提起。泥臭い言い方であるが、「本人さんはどう思てはるんやろ？」と問いかけ、それに応え得る関係を築いているかと問う。この子らと「関わる」こと、そこでしか分からないのではないかと提起。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

26

IV. 「生命的なもの」と 「エモーショナルなもの」

重症心身障がい療育は、「エモーショナルなもの」＝情動論を基底にした対人関係論

岡崎の療育論は対人関係論であり、それは自ずと重症心身障がい地域福祉論にも拡張される。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

27

生命的なものと岡崎「エモーショナルなもの」(1) 岡崎の言説から

1960年頃 情動の研究・理解（岡崎日記から）

1964年 母子共生の分離不安による園児の死を経験

1967年 「夜明け前」撮影時のインタビュー

1980年 日本教育学会調査団のインタビュー

1986年 ろう・言語教育関係での講演で

「そういうエモーショナルな人間関係みたいなことを前提としないと、・・・そのへんのコミュニケーションというのか、あるいは人間関係というのか、そういう基盤みたいなものは、どうも障害があろうがなかろうが、耳が聞こえなかろうが、基盤としては同じなのとちがうか。その基盤というのには、『エモーショナルなもの』とちがうか。」と述べている。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

28

岡崎「エモーショナルなもの」(2)

1. はだかのいのち

「はだか」、何もまもっていないということ。言葉や理屈などではなく、つまりこの生命、身体である。

2. 外界、環境に対して絶えず身体全体の反応、姿勢を形づくるものである。

3. 人と人を「くっつけるもの」(Attachment 愛着)であり、関係や共同をつくる基礎。

この愛着が厳しい状況下で阻害されると臓器、生命にまで影響を与えることがある。そこに呼吸・栄養・運動・姿勢に注目し、そこに情動の発生をみている。

4. 生活意欲。「生きる」「生きたい」「生きていたい」欲求。生理的、心理的、関係的なもの。

重い障がいの場合、もっとエモーショナルな、もっと生理的な反応のようになり、「生きる」「生きたい」「生きていたい」という自らオリエントしていく自発的な働きがある。

5. 「エモーショナルなもの」は人間関係、社会関係の基礎。「つながりの火」「人間関係の最も深いところからの“幸”」=共感

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

29

生命的なもの「エモーショナルなもの」

皮膚でそれぞれが隔てられている人間同士、この隔てられている身体を超えてなぜコミュニケーションできるか。

身体から外に出るもの、出てくるもの。e-motion 〈e〉は「外へ」という接頭語。したがって、〈motion〉(動き)が外に出ること。

生命

生命に関わる〈呼吸・栄養・姿勢(緊張)〉の動き

表出

情動 = 「エモーショナルなもの」(欲求要求訴え等)

関係

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

30

「この子らを」と「本人さんは」

糸賀「生命の自覚における生活においては、（理屈や言葉は）いわば身にまとう衣の多彩ないろどりのようなもの」

糸賀の「この子らを世の光に」、「生命の自覚」、「共にいのちあるもの」、それが万人がもつ共感の原動力である。



岡崎は、それを「はだかのいのち」とし、そこに「つながりの火」をみ、「人間関係の最も深いところからの“幸”」である。



「本人さんはどう思てはるんやろ」とは、それに応え得る関係と問う場を築いていくことへと広げることができる。

※場や活動を「共に」するなかで分かり合う世界を広げること。そこに岡崎は「はだかのいのち」「エモーショナルなもの」の関わりが必要なのではないかとする。糸賀がどちらかと言えれば理念論であるが、岡崎は泥臭い経験論。まず「関わる」場を作り、広げることとする。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

31

参考：岡崎 療育論

「ゆさぶり」—「ひきだし」—「たしかめる」



「ある場が子どもにとって関心と興味があり、そこでは人と物とのかかわりが生き生きと活発に展開するとすれば、その核になるような人と物とのかかわりの部分を、次に来る別の営みの場にもちこみ、そこでの展開を支えてゆくようにする。いわば、特定の人と物との子どもたちにとって好ましいつながりを媒介として場をつなぐということができないであろうか。そうなれば新しい場での新しいつながりが生まれるであろう。」

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

32

参考：岡崎 地域福祉論

「障害者が自分自身の力を発揮して、自立、自助への道を歩むために、必要な環境をつくり、条件を整備する過程に、障害者自身も住民もが参加する機会と場をつくる必要がある。／障害が重度になれば、家族や施設、学校の職員等、直接関係者が代ることになるが、いわば本人のニーズは本人が一番よく承知しているから不適切な対策を立てる無駄を省くことができる。／さらに障害者にとって、そういう過程に、自分自身に関係ある具体的な問題をめぐって、住民とかかわり、視野を広げるこしとが出来ると同時に、これまでのようにもうきまっしてまった対策をただ与えられるだけというのではなく、自ら対策をつくる社会活動に参加したことになり、自立、自助への意識を生むことになるであろう。／又住民にしてみれば、障害者の生活実態にふれ、具体的なニーズを知ることによって、障害者を含めた地域社会のあり方、住民のあり方を考え、学ぶ機会になるにちがいない。」

V. 岡崎の思索を糸賀の系譜で とらえる

岡崎は、

糸賀思想は生命思想であるが、その生命を、重症心身障がい療育のなかで、岡崎は「エモーショナルなもの」としてとらえ発展させた。

岡崎は糸賀思想の継承者であるといえる。

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

35

岡崎は「この子らを世の光に」を自分のものとしえたか、糸賀への応答

岡崎が亡くなる前年近江学園の四十周年記念式典が行われ、岡崎も参加した。糸賀と近江学園のことが脳裡によぎっていたであろう。岡崎は最晩年の「びわこ学園だより」にこう書いている。それは、糸賀追想集での決意に対し、自分はそのようにできたであろうかという、糸賀への応答である。

「障害児者にかかわる現場で、『共に生きる』という言葉が使われます。近江学園の歴史からも、確かにこのことが取り組みの鍵になると思われま。言葉は美しく、言うのは容易ですが、障害児者自身に、成る程これなら、職員も自分達と共に生きてくれていると納得してもらえ構えが、職員に、施設にできるかどうか。

40年の近江学園が私の心に座り続けている訳もここにあるようです。施設の在り方はそのまま私自身の在り方なのですから。」

2022/6/2

岡崎生誕100年記念講演

36